

## 撫で牛は時をこえた縁起物 筋違いの夢に破れた御大老

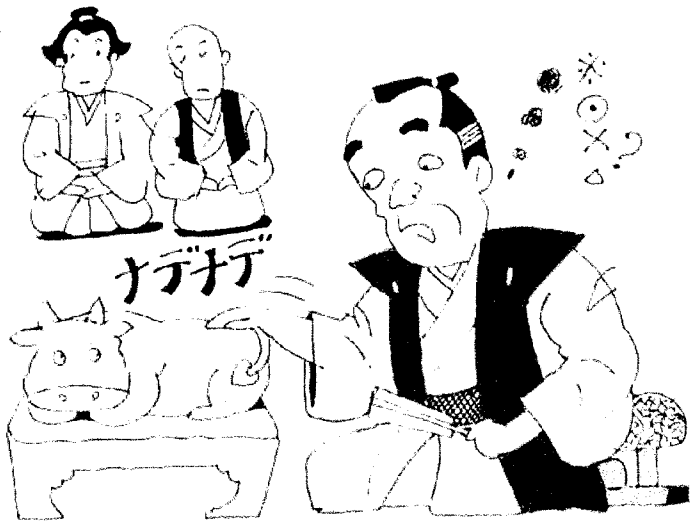
毎年、正月を迎えると、その年の干支とせにちなんだ動物が縁起物にまつり上げられる。が、そんなしきたりなどにかかわりなく、くり返し「希望の星」として迎えられているのが「天神様の撫なで牛」で、この信仰、遠く平安の昔から続いているというから、やはり御利益があるのだろう。

周知のように「天神様」と呼ばれて庶民の信仰を集めている天満宮は、別名、学問の神様とあがめられる菅原道真公を祭る神社で、受験戦争苛烈な現代では、かつてのいかなる時代にもまして頼みにされるスター的神様。その天神様のお使いが牛で、その牛を石像にした「撫で牛」をなでながら願いごとをすると必ずかなえられるといわれている。

なかでも京都市上京区馬喰町の北野天満宮は、全国に数ある天満宮の総本社。境内に撫で牛や臥牛が数多く鎮座し、現代の「迷える羊たち」に温かい？救いの手をさしのべている。

ところでこの撫で牛信仰、江戸中期の政治家として悪名を残した老中・田沼意次おなづ（一七一九～八八）も深く帰依していたとか。この男、かたわらに銀製の牛の像を置き、ひまさえあれば何やら呪文を唱えながらそれをなでていたと伝えられる。

田沼は、はじめ紀州徳川に仕える小役人だったが、病弱の十代將軍家治に信頼され、側用そば



人から遠州（静岡）藩主に栄進、ついには老中にとり立てられて政治の実権を握るなど、そのトントン拍子の出世が話題になった。そのため、老中は無理としても、せめてその半分ぐ

らしい幸運にでもあやかりたいと、田沼の「銀製」からは二、三ランク落とした木製や陶製の撫で牛需要が起こり、一時期、当時の江戸職人たちを大儲けさせたという。

意次は、産業振興のため、印旛沼や手賀沼の干拓、蝦夷地の開拓などのほか、長崎貿易の制限を緩め、銅や海産物の輸出を奨励したり、商工業者の「株仲間」を結成、冥加金みょうがを取り立てるなど、商業を中心とした幕府財政の立て直しを図った。

そのため、ニンジンや鉄、銅などを幕府の専売にしたり、貨幣の改鑄なども行った。しかし、職掌が商人たちと多く交わるうちに、しだいに彼らのわいる攻勢が激しくなり、ついには幕政にたいする信頼までも失わせる破目になった。

というわけで、菅原道真公は、あくまでも学問の神様。撫で牛もわいる稼ぎに悪用したのでは功德はない。